



30年ぶりに開催予定 多賀神社御神幸



直方市の多賀神社と氏子総代会は、1992年を最後に休止していた「御神幸」を、秋季大祭中の10月15日（土）に30年ぶりに開催することを発表しました。黒田直方藩五万石の産土神として信仰を集めてきた多賀神社の御神幸は、昭和35年、福岡県指定無形民俗文化財に指定されており、300年以上の歴史があります。約1400年前に起源をもつ京都三大祭りの1つ、「葵祭(あおいまつり)」に倣い、平安時代の優雅な装束と江戸時代の武士のかみしも姿に身を包み王朝風俗を華やかに再現した氏子らが直方市中心部を練り歩きます。御神体に錦蓋(きんがい・絹の布のこと)をかけ神馬に乗せ、宮司が輿に乗るところは他に例がなく、この祭りの特徴とされています。

御神幸に関して、直方市史では、『神官は衣冠束帯に正装し、社用人は素襖・黄袍・褐衣・退紅・白丁等の衣装をし、平安王朝の都の公家たちの服装で色どりもきらびやかである。500人余の氏子供奉者は江戸時代の直垂(ひたたれ)・上下姿で、(中略)古典絵巻さながらの観を呈する。拝観の群衆は筑前・豊前のもとより長州・壱岐・対馬から来た記録もある。御神輿の路地に当たる家の前には奠座を敷き座って拝観し、神輿に柏手を打って拝観するなど厳粛を極めた。』と記されています。

今年開催予定の御神幸では、開催規模を92年開催当時の3分の2程度に縮小し、約350人が中心市街地を練り歩く予定です。

「祭礼行事 福岡県」 N386ケ 「直方市史 下巻」 NL219ノ

筑豊の民話 -甚五郎と河童-

明治の始め頃、犬鳴川は綺麗で水量も多く、鮎が四斗(約72L)樽にいっぱいとれていた頃のお話です。

植木の下町に田代甚五郎という元気者がいました。夏の夜中に縁側の雨戸をトントンと叩いて「甚五郎、甚五郎」と呼ぶ声に甚五郎と家の者は目を覚ました。甚五郎が縁側に出て雨戸を開けると、子どものような声をした男としばらく話をしていましたが、家の者に黙ってその男と連れ立って家を出ました。

いつまでたっても甚五郎が帰ってこないで、家の者は心配になってきました。探し回って犬鳴川の川原に行くと、水際で甚五郎らしい男とギャギャッと異様な声で騒ぎ立てる連中が相撲をとっていました。人々が近づくと相撲の相手はザブンザブンと川に飛び込んで逃げました。人々が用心して遠くから見てみると、相手はまた川から上ってきて甚五郎と相撲を始めるのでした。人々には甚五郎の相手の姿が見えず、しかも相手は負ければ次々にあら手と代わって組み付く様子なので、これは河童に違いないと気づき、このままでは甚五郎がやられてしまうぞと、張り切っている甚五郎をみんなで手取り足取りして家に連れ戻しました。

家に帰った甚五郎はぐったりとなって、そのまま七日七晩寝通しでした。ようやく目が覚めたのでみんなが尋ねますと、「河童に呼び出されて川原に行くと数匹の河童がいて相撲をとることになった。手に唾をつけると、そんなことはするな、川で手を洗えというので言われた通り川で手を洗って相撲を始めると、相手は負けるたびにあら手を繰り出したが、河童に負けてたまるかと渾身の力を振るっているところを無理やり連れ帰られた」と話したということです。

「直方むかしばなし」 N388ノ



「かもめの水兵さん」の作曲者として知られる河村光陽（直則）は、1897（明治30）年、現在の福智町上野に生まれました。幼いころから福地神社のお神楽の練習をするなど、音楽に興味を持っていました。小倉師範学校卒業後、地元の金田小学校に在職しましたが、音楽への思いを断ち切れず、世界に影響を及ぼした作曲家のいるモスクワへ行こうとしましたが果たせず、朝鮮の京城（ソウル）で教鞭をとりながら、作曲の勉強を続けます。

1924（大正13）年に帰国し、東京音楽学校で学んだ後、1936（昭和11）年キングレコードの専属作曲家となります。この年に童謡の代表作となった「うれしいひなまつり」（山野三郎/作詞）「かもめの水兵さん」（武内俊子/作詞）などを発表しています。光陽は童謡の他にも児童音楽への社会活動に専念し、合唱団やバイオリン指導などに力を尽くしました。作品には歌曲、民謡、団体歌など千曲ほどがあります。1946（昭和21）年病気のため50歳の若さで亡くなりました。

光陽は小学校の教師をした経験から、子どもたちの歌が流行歌や外国曲が多いことを憂い、「日本人による日本の歌を」との思いから童謡の作曲をはじめました。日本民謡の旋律を取り入れた旋律は光陽の特徴とされ、それは光陽が育った故郷上野村の美しい自然や文化が影響しているといわれています。童謡作品はどれも歌いやすく懐かしく、これからも歌い継がれることでしょう。

主な作品：「グッドバイ」（佐藤義美/作詞）「赤い帽子白い帽子」（武内俊子/作詞）

「仲よしこみち」（三苦やすし/作詞）「りんごのひとりごと」（武内俊子/作詞）など。



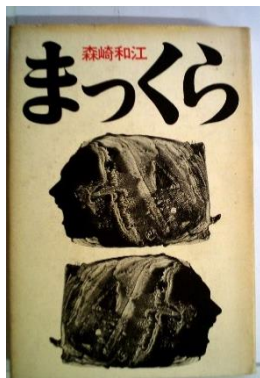
赤池町史 NI219 ち

はじめの一步 ～郷土資料の紹介～

直方市立図書館にある郷土関係の本を紹介していきます。
郷土の歴史や文化に興味をもっといただくきっかけになればと思っています。

『まっくら 一女坑夫からの聞き書き』

森崎和江//著 N 567 ち



今年6月に亡くなった詩人・ノンフィクション作家森崎和江さんのデビュー作であり、代表作となる作品です。1958年谷川雁や上野英信らと『サークル村』創刊に関わり、妻や母という名を外した女たちの交流誌として「無名通信」を発行しました。その後炭住で暮らしながら、女坑夫たちからの聞き書きを本にしました。「働かな、うそばい」。炭鉱の地の底で懸命に働いた女たちの、たくましく誇り高い生き様を、言葉とともに伝えています。

直方市立図書館 直方市山部 301-11 コメニティのおがた内
TEL 0949-25-2240 FAX 0949-23-3902